

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月15日現在

機関番号：10106

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720085

研究課題名（和文） なぜ長い18世紀の英国の劇場では女優だけが〈黒塗り〉をしなかったのか？

研究課題名（英文）

Why only actresses did not “black up” in the long eighteenth century theatre?

研究代表者

福士航（Fukushi Wataru）

北見工業大学・工学部・准教授

研究者番号：10431397

研究成果の概要（和文）：

本研究では、長い18世紀（1660-1800年）の英国の舞台において、なぜ女優だけが人種的差異を示す〈黒塗り〉をしなかったのかについて、おもに演劇の慣習や美学的意識に関する側面と、ジェンダーや人種に関する言説との関わりから検討した。その結果、劇場での利益を追求するために人種的〈他者〉のイメージが操作されたことが明らかになり、商業主義と人種差別的言説の生成の一端を、当時の劇場が担ってもいたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This study explores one core question: “Why only actresses did not “black up” in the long eighteenth century theatre?” To answer this, I examined two sets of ideas: a discourse concerning theatrical convention and aesthetic recognition of blackness; a power relationship in representing women and racial “others”. This study has shown that racial “otherness” was manipulated in the long eighteenth century theatre in order to make a profit from the theatre production, and that in that theatre a mixed ideology of racism and commercialism was generated, regenerated and distributed.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2010年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 2011年度 | 300,000 | 90,000 | 390,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,600,000 | 480,000 | 2,080,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究代表者は、これまでに、英国王政復古期の演劇における〈他者〉表象に焦点を絞って研究を行ってきた。特に英国初の女性職業作家アフラ・ベイン（Aphra Behn）の演劇における〈他者〉の表象を研究対象とし、従来はフェミニズムの立場から論じられ

ることが多かった彼女の作品群を、多面的な見地から読み直してきた。その際、従来〈他者〉の指標と捉えられてきたジェンダー・人種・階級の諸要素だけでなく、振る舞い（behavior）の規範という要素も〈他者〉の指標として機能していることに着目し、ベイン演劇における〈他者〉表象の多様性・多重

性を考察してきた。更に、人物造形の背後に働いている諸言説に目を向け、ある人物が〈他者〉として表象される際に、どのような言説の影響が読み取れるかを研究課題としてきた。

(2) 〈他者〉の表象の背後にあるイデオロギー的・言説的な作用を読解するという研究方法では、出版されたテキストを主に分析の対象とするために、ややもすると、演劇作品の上演における要素を見逃しがちであることもまた事実であった。Peter Holland, *The Ornament of Action* (1979) のような先駆的な研究が、役者の特質・持ち役や舞台装置など、上演時の諸要素こそ演劇作品の理解に不可欠であると説得的に主張していたものの、王政復古演劇研究における上演研究はむしろ停滞傾向にあった。近年になって、Nancy Copeland, *Staging Gender in Behn and Centlivre* (2004) など、個別の作品論において上演時の諸要素を考慮に入れる論考が発表され、上演研究と文学としての演劇研究とを橋渡しはじめる中で、上演も広義のテキストに含まれる要素ととらえ、〈他者〉が表象される上演時の諸要素をも研究の対象に含める必要性を痛感するようになった。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、長い18世紀の英国演劇界で広く行われていた演劇的慣習、すなわち女優だけが人種的他者を表す〈黒塗り〉をしなかったという状況に着目した。これまでの研究では、人種的〈他者〉を表現する方法である〈黒塗り〉とそのジェンダー間の不均衡に関しては、単に演劇的慣習の一つとして認識されているに過ぎず、その演劇的・文化的な重要性が十全に説明されているとは言えなかった。しかし、〈黒塗り〉に見られる男女差は、長い18世紀のイギリス演劇において、有色人種女性を表象不可能な地位に追いやることで演劇的表現方法に制約を課しつつ、審美的な価値基準と、人種・ジェンダーに関する言説との結節点となるものでもある。本研究では、長い18世紀の舞台で女優だけが〈黒塗り〉をしなかった事実の背後にある力学を、学際的な見地から、演劇的・美学的な言説と、人種・ジェンダーに関する言説とを検討することで明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 演劇的・美学的言説を検討するために、18世紀に出版が相次いだ俳優伝や演技術に関する文献を検討することから始め、Charles Gildon, *The Life of Mr. Thomas Betterton* (1710) や Colley Cibber, *An*

Apology for the Life of Colley Cibber (1750) などに見られる演劇的な所作の約束事・表現方法に見られる美的な価値観を精査した。

(2) ジェンダー・人種的言説の検討に際しては、当初の計画では、植民地経営の報告書、黒人奴隷の扱いに関する意見書などを主に精査する予定だったが、ロンドンが中心の劇場との関係を考察するうえで、より直接的な情報を得られることを期待して、ピープス (Samuel Pepys) の日記や、David Dabydeen, *Hogarth's Black* (1985) といった基本図書にあたることにした。また、近年の〈黒塗り〉研究の成果である Virginia Mason Vaughan, *Performing Blackness on English Stages, 1500-1800*. (2005) や、Gretchen Gerzina, *Black London* (1995) などの文献を参照し、ロンドンと劇場における黒人の存在や、その表象のしかたを検証した。さらに、こうしたジェンダー・人種的言説と、劇場における演劇的・美学的言説とのかかわり合いを精査した。

(3) 人種・ジェンダーに関する言説と、演劇の言説との接点として鍵となるテキストは、トマス・サザン (Thomas Southerne) に始まる、一連の *Oroonoko* 改作劇である。ペインの散文をサザンが演劇化した1695年以来、オルノーコの妻イモインダは、原作での黒人から白人へと設定が変更され、オルノーコとイモインダの悲恋は、黒人同士のものではなく、異人種間のものへと書きかえられてしまった。女優が〈黒塗り〉をする慣習がなかったことがこの改変の一因となっていた。イモインダを実際に黒人が演じるのは、Biyi Bandele による1999年の改作を待たねばならず、結果としてペインの『オルノーコ』の主題の一つであった黒人同士の連帯を舞台上で描く機会は、300年以上も失われてしまうことになる。このように、現代までつづく問題系の端緒が、長い18世紀の劇場にはあったのであり、植民地主義とあゆみをともしする人種差別主義の言説と演劇とのかかわり合いの歴史を検証する作業に取り組むこととした。

これら *Oroonoko* 改作劇のうち、本研究では、とくにサザンの『オルノーコ』を集中的に分析した。

4. 研究成果

(1) 演劇的・美学的言説の分析の結果、王政復古以降の劇場が、特に悲劇において目指していたことは、俳優の内面に宿った感情を演技によって外部へと開くことであり、そうして表出された感情を観客たちと共有することで感動を生み出そうとしていたという

ことが明らかになった。この作業を進める中で付随的にはあるが、劇場がいかに利益の追求を求めていたのかが、劇場関係者の書き残したもからはっきりとうかがい知ることができたことも大きな収穫であった。

(2) ジェンダー・人種的言説に関する検討の結果は次の通りである。ロンドンにおいて、王政復古期にはすでに黒人は男女とも一定数居住しており、家事仕事などに従事していた。ただし上流階級の社会において黒人はいまだ従属的な存在で、肖像画に富の象徴として黒人の子供を共に描きこむ風習もあり、上流階級の社交場としての側面もあった劇場では、黒人が観客のなかに存在していたとしても、彼らが劇団側の集客戦略のメイン・ターゲットになることはなかったことが明らかになった。

(3) 演劇的・美学的言説と、ジェンダー・人種的言説の結節点となる演劇テキストとして、主にサザンの『オルノーコ』を分析し、まず、テキストがいかに感情の可視化を追求しているかを明らかにした。

テキストは、オルノーコの側近で右腕的存在であるアボアン (Aboan) と、オルノーコとの関係では、奴隷状態に身を落とすことを潔しとしない〈名誉〉を追求する態度を示す。一方で、オルノーコと妻イモインダとの関係では、〈愛〉の感情表出を目指すのである。〈名誉〉を追求するオルノーコとアボアンとの関係において、隷属状態にありながら、実際には奴隷労役を免除されているオルノーコが、妻イモインダとの穏やかな生活に甘んじている様子を見て、アボアンは奴隷の身分からの解放をオルノーコに要請する。その際、〈名誉〉を追求するように求めるアボアンが、オルノーコに求める行動の第一番目が、〈義憤〉 “brave resentment” という感情を表現することなのである。アボアンの説得を最終的に聞き入れたオルノーコは、3幕2場の「ライオン・スピーチ」において、自らを眠りから覚めた獅子と同一化し、ライオンの吠える声を思わせる台詞回しで、アボアンが求めていた〈義憤〉を表現し、ついに奴隷蜂起を煽動することになるのである。

また、イモインダとの関係において表現される〈愛〉の感情は、とくに2人が死別する最終場において、もっとも具体的に可視化が行われる。最終場において、オルノーコは、奴隷蜂起の失敗により追い詰められ、追っ手の手にかかって不名誉な死を遂げるよりは、愛する妻と妻のおなかに宿る子どももろとも、名誉ある自殺を遂げようとする。この場面では、外連味たっぷりに、イモインダ刺殺を4度も延期する。別れのキスを交わした直後には、‘O! where shall I strike?’

(5. 5. 232) と刺殺を思いとどまり、最初の延期が行われ、二度目には ‘drops his Dagger as he looks on her, and throws himself on the Ground’ (5. 5. 250 s. d.) というト書きにあるように、短剣を手から落とし地面に泣き伏せるという所作で愛する人を名誉のために殺さなければいけないという板挟みを表現する。それならば、と短剣を拾い上げ自殺を図るイモインダの手から短剣を取り上げ、3度目の延期がなされる。4度目の延期においては、「顔をそむけ、手を顔と反対側に伸ばす」という所作でオルノーコは板挟みの感情を表現し、ついに自らイモインダを刺殺することはできない。最終的にイモインダがオルノーコの手を手を重ね、自らの胸を刺す、というかたちで2人の〈愛〉の葛藤は表現されることになる。この場面で明らかなのは、一連の絵画を見るように、オルノーコとイモインダの演技がなされるよう配慮されたテキストであるということだ。こうした表現法は、現代の我々から見れば大仰なものに見えるかも知れないが、同時代の演技理論に完全にのっとったものであった。Gildon の *The Life of Betterton* には、〈悲しみ〉を表現する演技法として、上述の「顔をそむけ、手を顔と反対側に伸ばす」という所作を推奨している箇所があり、いかに感情を可視化するかということが、当時の演技理論の中心にあり、サザンの『オルノーコ』も、その理論を十分意識したテキストとなっているのである。

劇場で感情の可視化を目指すのは、当時の演技理論に、感情の共有こそが、観客を感動させる手段であり、それを達成し「社会的な絆」を観客と俳優たちとの間で結び結ぶことで劇団も利益を上げる上演が可能になるという考え方が根底にあったためである。サザンの『オルノーコ』においては、感情を可視化し、観客と〈感動〉を共有するために、劇団のメイン・ターゲット層であった白人、なかでも同情の涙を流すことを「楽しみに」来場していた白人女性と「社会的な絆」を取り結ぶために、黒人女性の表象が舞台上がる機会が奪われたことを、本研究では明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1件)
Wataru Fukushi, “Visible Passion and an Invisible Woman: Theatrical *Oroonoko*”、『人間科学研究』第8号、査読有、2012年、1-23.

[学会発表] (計 1件)
福士航、発表題：「なぜイモインダは白人に

変えられたのか?」、発表学会：第48回シェイクスピア学会、2009年10月3日、於：筑波大学

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計◇件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福士 航 (FUKUSHI WATARU)

研究者番号：10431397

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：